

アニメで知る心の世界 6月

こもれば心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品： 若おかみは小学生！ 劇場版

あらすじ

小学校6年生の女の子・おっここと関織子は、突如、交通事故で両親を亡くし、温泉旅館・春の屋を営む祖母・峰子に引き取られることになる。しかし春の屋には、幽霊のウリ坊こと立売誠が住み着いていた。ウリ坊は峰子の幼馴染で、峰子のために、なんとかおっこを春の屋の後継ぎにしようとする。このウリ坊の懇願への対応が、ユーレイの见えない周囲には旅館の手伝い立候補に聞こえた上、その後接客中に倒れた峰子の代わりをやれると公言したことで、おっこは春の屋旅館の若おかみとして修業することになってしまう。

その後、様々なユーレイや魔物が現れ、当初おっこは戸惑うが、徐々に仲良くなり、彼らと一緒に旅館を訪れる一癖も二癖もあるお客さん達と触れ合っていく。その触れ合いを通じて、おっこは若おかみとして花の屋旅館を継ぐ覚悟を持つようになる。

温泉旅館の周囲の人たちそしてユーレイたちとの触れ合いを通じて、おっこは心の傷を癒やし、徐々に喪失を受け入れ、大人の階段を駆け登っていく。そんな思春期に至る心の過程を瑞々しく描いた作品

今回のテーマ

1. ユーレイは若おかみ関織子（おっこ）にとってどの様な役割を担ったか？
2. 旅館のお客さん達と若おかみとの交流を通じてお互いどの様に変化していったのか？
3. 神楽を舞うということはどういう意味があるのか

1. ユーレイは若おかみ関織子（おっこ）にとってどの様な役割を担ったか？

関織子（おっこ）は小学6年生で思春期に突入しようとしている時期。その時期まで両親と仲良く暮らしていた。しかし突然の交通事故で両親を亡くしてしまい、祖母に引き取られ、彼女が経営する温泉旅館の手伝いを始める。そこで遭遇したユーレイ達と交流していく。

cf: エースをねらえ！の構図：平和な世の中で人々が暮らしていたが、突然脅威となる対象が出現し、これまでの秩序を壊し、周りの人々は混乱する。その中で主人公が自分の生きるべき道を見出し、成長していく。

→これが Adolescence Process

若女将～では脅威となる対象はいないが、主人公である関織子（おっこ）は両親の喪失を受け入れられないでいる。→喪失を否認しており、Adolescence Process に向かっていない。

（だから秩序の崩壊や周囲の人々の混乱はない）それゆえに「物分かりの良い子」という潜伏期の心性に留まっているようにも感じられる。

→心の成熟を進めるにはまず、おっこの傷ついた心を抱えることが不可欠と考えられる（「あの花」のユーレイとなって現れた、めんまのような存在）。

温泉：心身のリフレッシュ、回復のイメージ

父「花の湯温泉のお湯は誰も拒まない。動物も人間も。すべてを受け入れて癒してくれる。」

→花の湯温泉のとりまく環境がおっこを抱える環境となり、彼女の喪失し、傷ついた心を癒す

ユーレイ：ウリ坊、美陽 魔物：鈴鬼

ウリ坊：春の屋の女将である峰子の初恋の相手。峰子が引っ越していなくなり、心残りから屋根の上り、そこから転落して死亡し、ユーレイになる。おっこ家族が交通事故にあったときにおっこを助ける。

「おっこは一度死にかけたさいな。あの世と通じやすうなったかもしれへんな。」

→おっこは両親が亡くなってしまい、自宅を離れ、祖母の温泉旅館で暮らすという現実を受け入れられない状況。だから両親が出てくる幻想を何度もみている。

ウリ坊はおっこが春の屋旅館の跡を継ぐよう仕向ける。

ここの旅館の中で皆さんと一緒に暮らしていきますという決意表明

→両親を失ったおっこを憐れみ、今後どの様に関わっていけばいいのか途方に暮れ、悩んでいた旅館の方々が、この話題から和やかになり、彼らがおっこを暖かく迎え入れる下地を作る。そして現実を受け入れていくための後押しをしている。

美陽：秋好旅館の娘。おっこの同級生であり、同じく秋好旅館の娘、秋野真月が生まれる前に7歳で亡くなっている。真月をサポートしているが、秋好旅館内では誰も彼女が姿が見えず、おっこのところに居座る。

おっこに対して手厳しい発言をするが、ある種、秋野真月（対峙しなくてはならない、敵わない相手＝エディプス的対象）とおっこが関わるための橋渡しの側面になっている。

→ウリ坊と美陽はある種、おっこの父と母の身代わりのようにも感じられる。

鈴鬼：長らく開かずの間で封印されていたが、おっこがふとしたことで解いてしまい、現れる。生意気で食いしん坊。→甘えん坊：ある種幼い頃のおっこ

旅館にお客を呼び込む力を持っている。しかし呼び込まれた客は、皆、何らかの問題を抱えた客であり、その対応におっこは苦慮し、心かき乱されることになる。しかしそれは自身の葛藤に向き合い、成熟する役割をになっている。

→ある種成熟する道筋を作っていた役割を果たしている。

→上記のようにユーレイや魔物はおっこの取り巻く人々（外的対象）との関わりをサポートし、彼女が成熟し自立した一人の人間になること見守っている。

→イマジナリーコンパニオン（移行対象：実際に彼らのぬいぐるみもある。）

移行現象【D.W Winnicott】

内的現実にも外的現実にも属していない生きていることのある重要な側面。

幼児が自分でないもの（not me）から自分（me）を分離しはじめるにつれて、絶対的依存から相対的依存の段階へと進みながら、幼児は移行対象を利用する。

しかしここでは両親を失ってしまったという喪失に伴う情緒的交流はあまり描かれていない。

おっこ（エツコ、康、祖母との顔合わせのシーン）「悲しいよ、悲しいに決まっているじゃん。でも、言いたくない。そう言ったら、みんなもっと辛そうな顔になる。」

→喪失に伴う感情を受け止めてくれる対象が必要。

2. 旅館のお客さん達と若おかみとの交流を通じてお互いどの様に変化していったのか？

このアニメにやってくる旅館のお客さん達は、皆、何かしらの喪失の体験をしており、そのことを受け入れられず、苦しんでいた。そして彼ら彼女らは当初は旅館の料理を受け付けず、若おかみをはじめ、旅館のスタッフ達が試行錯誤する中でお客さんにあった食事を提供し、お客さん達は美味しく食事をとり、満足して旅館を去っていく。

これは旅館に行き、お客さん達が抱えられる中で、妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行していることを意味する。

しかしこのお客さん達はある種、主人公である、おっこの投影であり、お客さん達が心的に変わっていくのを見続ける中で、おっこ自身の問題として捉えるようになったと考えられる。

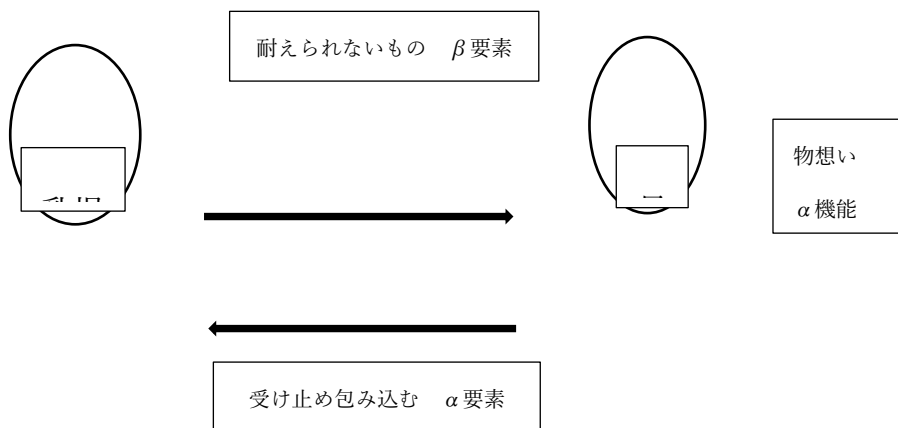
そのことを詳細に検討していく。

→食事を受け入れない：現実を受け入れられない 成長への拒否

→お客さん達が受け止められない現実を若おかみ達スタッフが受け止め考え、そしてそれを受け止め包み込むという作業をしている。

→ビオンの母と乳児のコンテイナー／コンテインドのモデルに依っている。

ビオン：母と乳児のコンテイナー／コンテインドのモデル



i) 神田幸水、神田あかね親子との関わり

神社の石段の下で具合悪そうに座り込んでいる男の子（神田あかね）と彼を介抱する父（神田幸水）を見かけたおっこがウリ坊の指示に従うように春の屋旅館に招く。

神田あかね：1ヶ月前に母をなくす。そのなかでひねくれた態度をする。

あかね「ほら、すぐそれだ！母さんが死んだって言ったら、どいつもこいつも、かわいそうって。もうたくさんだ！」

あかね「がんばらなくていいときに頑張ってるやつ、見るのも嫌いだし」

そういったあかねの態度に腹を立てるおっこ。そして自己開示し、あかねとぶつかり合う。

→あかねの言った言葉はおっこ自身が、実は感じていたことをストレートに表出している。

一方であかねは弱音を吐いている自分が嫌いで、両親が亡くなってもしっかりしているおっこに対して羨望の念を抱き、その良い対象を攻撃したい思いとこの苦しい思いを受けめてほしい思いが交錯している。

その後、祖母とおっこが一旦神田親子から退出し、祖母がおっこに説教

おっこ「もっと普通のお客様なら良かった。」

→自分の感情がかき乱されたことを後悔し、そういう感情に向き合いたくないという思い

祖母「普通のお客さまなんて言い方はお客様をみていませんというのと同じ」

→お客様と向き合うことの大切さを伝えている。つまり自分自身の心に向き合い、交流する

ことの大切さを伝えている。：祖母の父性的側面

祖母とおっこが謝罪しに神田親子の部屋に伺う。そこであかねの熱が下がり、あかねは空腹

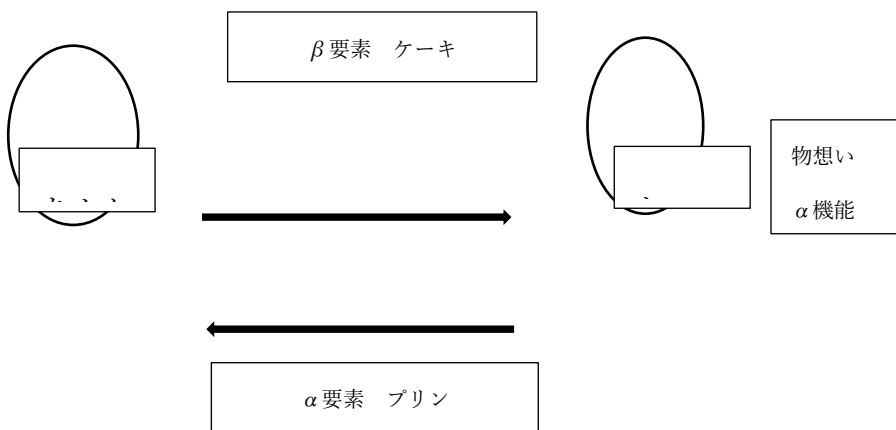
を訴え、「オムライスが食べたい」「ケーキ」という。：退行

その言葉におっこは温泉街のケーキ屋さんを色々探す。

おっこ「あかねさん見ていたら、グウツて胸に刺さってきて。」

→あかねの母喪失した様々な感情がおっこの心に去来した。：投影→行動化

あかねとおっこの心の動き



上記のようにあかねの耐えられない何か(β要素)をおっこが受け取り、受け止め包み込み、

露天風呂プリンをあかねに作って(α要素)あげた。

しかしあかね「ありがとう」というものの、元気なく、「あーあ！」と言い、プリンから背ける。そして布団にこもって泣きじゃくる。

→思い通りにならない虚しさをぶつける。

→ケーキでなく露天風呂プリンを渡したということは、おっこがあかねの母の喪失感を真正面から受け止めたが、一方で自分は母ではない(母はいないが、あかねの苦悩を受け止める対象は存在する)という意味でもあるように感じられる。

→今までの幻想を断念し、母の喪失を受け入れ、立ち直るきっかけになった。：抑うつポジションの移行

ii) グローリー水領（すいりょう）との関わり

①出会いのはじまり

水領は旅館に泊まり始めた当初は食事もほとんど摂らず、自室にこもって幕をひき占いに没頭していた。そこにおっこが入り、幕が破れ、光が差し込む。

水領「別れた彼とわたしの相性は、これ以上ないぐらい良かったの。だから、仕事が忙しくてすれ違いが多くても、大丈夫って自信があったの。だけど……」

「別れを告げられちゃったの。それも最高に……。それで自信がなくなってしまって、その日から、占いができなくなったの」

→水領は彼との失恋そして自身の職業人としてのアイデンティティの自信喪失と両方の喪失的体験を味わう。しかし占いという万能空想の喪失が受け入れられず、花の屋宿泊当初は食事も摂らず、占いという自分の殻に閉じこもっていたが、おっこはその殻を破った。

おっこは当初、水領の姿に圧倒され、たじろぐが、水領の存在を受け入れようとし、ガスパッチョを提供し、彼女の懐に入り、交流することで、水領は現実を受け入れる。

「占いは私の天職。そろそろ戻らなくっちゃね。」(喪失からの再建：抑うつポジションへの移行)

おっこをショッピングに誘う。

水領「友達とおしゃべりとか、おしゃれしてデートとかしないの？」

それに戸惑うおっこ

→大人への誘い（いざない）

②交流の始まり

ショッピングモールに行く道中の高速道路で大型トラックを見かけ、両親を失う交通事故の記憶が蘇る、パニック発作を呈する。そこで初めて水領に両親を失った思いを伝える。

おっこ「でもあたし、お父さんもお母さんも生きていた感じがしてしょうがないんです！」→

両親の喪失をなかなか受け入れられない思い

しかし水領の旅館に戻る提案を断り、買い物に行くことを希望する。

おっこ「あたし、行ってみたいんです。」

→両親の喪失をまだ受け入れられない、けれども今を生きて、大人になる希望を持っている。

その後アニメではジンカンバンジージャンプの歌が流れる。

ジンカンバンジージャンプ：人間万事塞翁が馬＋バンジージャンプ（通過儀礼の紀元）

ショッピングを終えて帰ってきた後に大人らしくなったおっこに祖母やエツコが驚く。

iii) 木瀬家族との関わり

①父の抑うつポジションの移行

旅館で供された食事を木瀬文太（父）は「薄味すぎて病院のメシと変わらねえ」と言い、ほとんど手をつけなかった。

木瀬文太：交通事故により腎臓を摘出（脾臓もよくないのだろう）塩分の強いものや脂っこいものを食べられない。

「やっと家族で旅行ができるようになったんだ。今日ぐらいこってりとしたもの食いてえじゃねえか」→事故により自身が色々なものを喪失したものを受け入れられないでいる。その受け止められないものをおっこ達に投げ込む。

その思いを受け止め、どうしようかとおっこ達は考える。

→そこでおっこは秋野真月のいる秋好旅館に向かい、彼女と向き合い、関わり、花の湯牛とレシピを提供される。

それは、秋野真月というエディプス対象に向き合うなかで、両親の幻想から離れ、花の湯温泉という現実世界に生き抜くんだという覚悟が出てきたという暗示とも考えられる。だから鈴鬼が出てきて、「お別れの日が決まりました。」という。

そういう過程を経て、木瀬文太に食事を提供し、彼は美味しく食べる。それは現実を受け入れたことになる。

木瀬文太「こんなふうに家族でのんびり風呂に浸かって、うまいもんが食えるなんてなあ…
…。生きててよかった……」

そこで事故を起こし、ずっと入院し、生死を彷徨ったこと、そして対向車の家族を巻き添えにってしまったことが語られる。

→現実を受け入れ、木瀬文太は抑うつポジションに移行した。

②おっこが喪失を受け入れるということ

しかし木瀬が起こした事故で巻き添えにした対向車の家族とはおっこの家族だということが判明し、話は急展開する。

若おかみとしてもてなしたいお客さんであり、両親がなくなった事故の加害者である木瀬文太：良い対象と悪い対象が混在している。

おっこの両親の出現：しかしいつもと違う真面目な寂しそうな表情をしている。

父「お父さんもお母さんも、おまえが生きていてくれることがうれしいんだよ。ぼくらはもうこの世にいないけれど、おっこは元気で立派な若おかみになってくれ。」

おっこ「あたしを一人にしないで」

父「おまえは一人じゃないよ」

おっこ「あたしを置いていかないで！」

→いよいよ喪失を受け入れ、分離し、大人になる一歩を踏み出そうとする一方で、なかなか喪失を受け入れられず、親がいた幼少期に戻りたい（退行）思いも混在し、苦しんでいる。

→そのために良い対象と悪い対象が混在している木瀬文太の場にいることができず、パニック状態になり、部屋を飛び出してしまう。

→この混沌とした感情をおっこは受け入れられず、耐えられないもの（ β 要素）を排出し、その思いを受け止めてくる対象を求める。

おっこ「ウ、ウリ坊！ 美陽ちゃん！」と言い、旅館内を探し回る。けれどもウリ坊達はどう見えなくなっている。

そこでグローリー水領が現れ、車の中で木瀬さんの話をする。水領はその思いを受け止め、
「あなたは一人じゃないわよ」という。

その関わりで、若おかみとして旅館に戻ろうと決意する。

旅館に戻ろうとしたときに木瀬家族が真月の乗ってきた車で秋好旅館に移ろうとしている。
移ることを泣いて拒む木瀬翔太（息子）。その姿をみておっこは木瀬一家をこの旅館で受け
入れることを決意する。

木瀬文太「ありがとな、お嬢ちゃん、だけどおれがつれえんだよ。だってあんた…… あん
た、おれが死なせちまった関さん夫婦の一人娘の……織子ちゃんなんだろ？」

おっこ「いいえ。あたしはここの……春の屋旅館の若おかみです」

→両親の喪失を受け入れ、大人になる一歩を踏み出す。

3. 神楽を舞うということはどういう意味があるのか？

神楽：日本の神事において神を奉納する為に奏される歌や舞

→神座（かみくら）が転じたもの

その神座で真月とおっこが一緒に踊ったことが大きなポイントと考えられる。

秋野真月：対峙しなくてはならない、敵わない相手＝エディプス対象

そして真月との神楽の練習は通過儀礼を受ける準備段階とも考えられる。

水領との出会いの後、神楽の練習が始まる。

その後徐々にユーレイ達が見えなくなってくる。

→徐々に喪失を受け入れ、大人に一步近づきつつある。

神楽の練習当初、完璧にこなす真月の一方でうまく踊れないおっこ。そこに苛立ちを隠せず、

怒りをぶつける真月

真月「いつまでこんな調子なの！？この御神楽はね、花の湯温泉にとってずっと伝えていかなきゃならないたいせつなものなのよ！」

→通過儀礼を受ける覚悟ないおっこへの叱咤。

この当時は木瀬一家との出会う前で、まだおっこは覚悟を決め切れていなかったと考えられる。

木瀬一家の件でおっこは秋野真月のいる秋好旅館に向かい、彼女と向き合い、関わる。それは、秋野真月というエディプス対象に向き合うなかで、両親の幻想から離れ、花の湯温泉という現実世界に生き抜くんだという覚悟が出てきたという暗示とも考えられる。だからこそ、お神楽の日に二人の息があった舞が踊れたと考えられる。

花の屋に帰る車の中で、鈴鬼が出てきて、「お別れの日が決まりました。」「お神楽の日に、ウリ坊さんと美陽さんはこの世を離れて、天に登ります。」という。

神座：「神の宿るところ」「招魂、鎮魂を行う場所」

神座に神々を下ろし、巫女が人々の穢れを祓ったり神懸かりして、人々と交流する神人一体の宴の場。その中で真月とおっこは一緒に舞い、その中でウリ坊と美陽はこの世を離れて天に昇っていった。

→両親を失ったという喪の作業の遂行であり、大人になる為の通過儀礼を受けた。